

第67回 青雲塾報告

<http://www.seiunkai.net/kouryu/seiunjuku/list.html>

青雲塾担当 松井繁幸（第23期）
西尾公一（第25期）

1. 日時 2月15日（土） 午後1時30分～4時40分
2. 場所 大阪大学中之島センター 多目的室502
3. 講師 永田靖先生（大阪大学 演劇学研究室 教授 / 専門 演劇学）
4. 特別ゲスト 森本年（みのる）氏（劇作家・森本薫のご長男）

★ 2008年12月、森本薫の遺品や資料を大阪大学に寄贈されました。

<http://www.asahi.com/showbiz/stage/theater/OSK200812280009.html>

5. 演題 「森本薫と文学座」

6. 講師のプロフィール 大阪大学演劇学研究室のHPより

<http://www.let.osaka-u.ac.jp/theatre/>

20世紀演劇史と演劇理論。主として日本の近現代演劇や現代アジア演劇のドラマ論研究やインターカルチャリズムの研究、ロシア・アヴァンギャルド演劇の演技論研究などを通して、近代演劇やその演劇史記述のトータルな再検討を志しています。また近年のパフォーマンス研究を含む演劇研究方法に関心があり、近隣の自治体や諸機関と共同で演劇実践方法やその文化政策の研究も行っています。

【略歴】

1957年三重県生まれ。1981年上智大学外国語学部ロシア語学科卒業、1988年明治大学大学院文学研究科演劇学専攻博士課程単位取得退学。日本学術振興会特別研究員、明治大学人文科学研究所客員研究員、鳥取女子短期大学助教授、大阪大学文学部助教授を経て、2004年から現職。現在、大阪大学総合学術博物館長、日本演劇学会会長、IFTR（国際演劇学会）Asian Theatre WG Convener。

【主要業績】

共著訳書などに、『アジアにおけるトランスナショナル・パフォーマンス、アイデンティティ、移動性』（英文、パルグレーヴ）、『歌舞伎とロシア革命』（森話社）、『チェーホフを翻案する テキストと変容』（英文、ラトレッジ）、『グローバルに出会うローカル・パフォーマンス』（英文、ケンブリッジ）、『ヨーロッパ演劇の変貌—ゲオルグ2世からストレーレルへ』（白鳳社）、『日本の芸術論』（ミネルヴァ書房）、『アヴァンギャルドの世紀』（京都大学学術出版会）、『バロック的』（洋泉社）、『格闘する現代思想』（講談社）、リオタール他著『ポストモダン文化のパフォーマンス』（国文社）、カザルス著『セルゲイ・パラジャーノフ』（国文社）『演劇論の現在』（白鳳社）、『演劇論の変貌』（論創社）など。その他、18世紀ロシア演劇史関係論文、20世紀アヴァンギャルド演劇関係論文、演技論関係論文など多数。

【最近の口頭発表等】（抜粋）

「劇作家森本薫を語る」Performing Museum Vol.1 森本薫を上演する、永田靖、

記憶の劇場：大学博物館を活用する文化芸術ファシリテーター育成講座、2016年11月、

会議報告/口頭発表

7. 「劇作家・森本薫プロジェクト関連演劇講演『まだまだ生きてゐる』」パンフレットより

森本薫(1912-1946)は日本の新劇を代表する大阪出身の劇作家である。学生時代から34歳で若さで人生の幕を閉じるまで、旺盛な執筆活動を行ない、数多くの作品を残した。作品には演劇だけでなくラジオや映画シナリオ等も数多く存在している。

とりわけ『女の一生』は、当時の大東亜戦争政策を賛美するように書くことが求められ完成された作品だったが、森本薫が在籍した劇団文学座の中心的女優杉村春子の当たり役の一つとなり日本近代演劇史の中でも最多の上演回数を記録する作品の一つとなっている。

8. 永田先生から

・お話しをさせて頂けるのを光栄に存じます。森本薫は日本演劇になくてはならない存在でした。文学座との関係についてお話しをさせて頂ければと存じます。

・この度は大変貴重な機会をいただきましてありがとうございました。
また森本年様ともお目にかかることができましたし、とても意味のある、楽しい時間を過ごさせていただきました。（終了後、お便りをいただきました）

9. 森本氏から

・「森本薫と文学座」というテーマで講演して頂けることは、息子として光栄かつありがたく存じます。
・永田先生とも久しぶりにお目に掛かれて、楽しい時間を過ごさせて頂きました。それにつけても、皆さんのご見識の高さに驚きました。流石、阪大法学部と言う感がいたしました。

10. 青雲塾担当から

2019年2月、吹田メイシアターで開かれた劇作家・森本薫プロジェクト『まだまだ生きてゐる』の公演、大変興味深く拝見しました。とりわけラジオドラマ『時間について』が印象に残っています。たまたまエレベーターに閉じ込められた4人の立場の違う人たちに流れる時間感覚の違いを描いていて全く時代の隔たりを感じませんでした。

ところで、1933年(昭和8)7月、織田作之助が瀬川健一郎にせがんで京都大学の地下食堂で北野中学同級生の森本薫を引き合わせてもらったとき、すでに森本は劇作家としてその才能を評価されていました。のちに戯曲から小説に転じた織田にとって終生、尊敬・あこがれの対象であったことは間違いありません。織田作之助の読者としてはやはり外せませんね。

また、今年秋、9月から11月にかけて文学座と松竹が舞台『女の一生』を競演します。関西では10月17日から27日まで松竹で京都・南座での上演が発表され、主人公の布引けい役が大竹しのぶに決定しています。これは森本年氏に教えていただきました。今年は森本薫に新たにスポットライトが当てられる年、そういう意味でもタイムリーな企画ではないでしょうか。なお、森本さんにお訊きしたところ森本薫関係の資料が大阪大学に寄贈された経緯には河内厚郎(かわうち あつろう・評論家、文化プロデューサー)さんの助言があったそうです。森本薫が生まれ育った大阪の地縁、演劇学研究的に充実した大阪大学の体制を考慮されたためでしょう。いずれにしても、ご参加の皆さんからは、森本さんの決断に感謝の言葉が絶えませんでした。

第67回青雲塾 (2020.02.15) (写真)



①冒頭で自己紹介される森本氏 (後方左)



②永田先生のお話に耳を傾ける
(レクチャー全景)



③三高時代の森本薫の写真の説明される永田先生。織田作之助の姿も。



④茶話会にはいって空気がなごむ
森本氏 (左) と永田先生

製作 松竹

森本薫 補作
戊井市郎
段田安則 演出

女の一生

日本演劇史に燦然と
輝く不朽の名作に、
大竹しのぶが初めて挑む
大注目の話題作!

布引けい
大竹しのぶ

風間杜夫 高橋 英夫	堀 幸子 藤 京子	堀 幸子 藤 京子	堀 幸子 藤 京子
野村胡堂 林 隆太	堀 幸子 藤 京子	堀 幸子 藤 京子	堀 幸子 藤 京子

2020年
10月17日(土) ▶ 27日(火)

2020年
10月31日(土) ▶ 11月26日(木)

京都 南座 TEL:075-561-1155

〒105-0001 東京都港区赤坂1-13-3
TEL:03-3541-0900 新橋演舞場

⑤今年秋、文学座と松竹が舞台「女の一生」を競演。関西では10月17日から27日まで松竹 京都・南座で上演、布引けい役が大竹しのぶ。風間杜夫・段田安則と手堅いキャストが脇を固める。